〔論　　文〕

短期大学女子学生の痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージ

Images of the Demented Elderly and the Elderly Held by Female Junior College Students

柴　田　雄　企
Yuki Shibata

ABSTRACT

The purposes of this study are 1. to compare the mental image of female junior college students toward the elderly and that of the demented elderly, 2. to examine the relationship between their image of the elderly and their knowledge about the elderly, and 3. to examine the relationship between their image of the demented elderly and their knowledge about the demented elderly. 20 pairs of adjectives were presented to 76 subjects. The results of the investigation showed that the subjects' images of the demented elderly were significantly more negative than their images of the elderly. The date suggested that some of the adjectives scored about the elderly were found to have significant association with their knowledge of the elderly. The date also suggested the same pattern for the demented elderly. It was implied that the subjects' knowledge of the elderly was related to their positive attitude toward the elderly.

Key words: images of the demented elderly, images of the elderly, semantic differential method

問題と目的

日本人の平均寿命は2002年の時点で、男性78.32歳、女性85.23歳であり（厚生労働省大臣官房統計情報部，2004）、人生80年時代を迎えている。全人口に占める高齢者数も増加しているが、このような中で現代の若者は高齢者に対して、どのようなイメージを抱いているのだろうか。古谷野（1993）は、人々の老人観は、その社会で老人がおかれている状況を反映すると同時にそれを規定し、さらに老人自身の自己概念や適応にも大きな影響を及ぼすと述べている。

これまで高齢者イメージや老人イメージについての研究は多くなされてきている。保坂ら（1988）は大学生の老人イメージの規定要因として、老人への関心や祖父母との接触など個人の経験に基づく要因の重要性を指摘している。中野ら（1994）は小学生と中学生の高齢者との交流と老人イメージとの関連について検討し、年齢が小さい時に祖父母や老人と好ましい経験を多く持っていると、現在の老人イメージが肯定的になるとの結果を得ている。古谷野ら（1997）は中高年の老人イメージを測定し、「中高年齢者の老人イメージは、全体として中立的で、中立点よりわずかに肯定的な方向に偏って」おり、先行研究における大学生の老人イメージより肯定的であったことを報告している。滝川ら（1999）は「老年看護学概論」の授業前後での看護学生の高齢者イメージの変化を調査したところ、授業前に比べ、授業後は高齢者イ

メージが全体的に肯定的方向に変化していたと報告している。矢島(2001)は小学生を対象に、老人ホーム訪問体験やライフサイクル授業を受けた経験が老人イメージに与える影響について検討している。

高齢者イメージについての研究が数多くなされている一方、痴呆性高齢者のイメージについての研究はあまりなされていない。高齢者人口の増加により、痴呆性高齢者数も増加傾向にある。国立社会保障・人口問題研究所の新しい将来人口推計をふまえた統計によると、2000年には160万人、2015年には262万人にまで増加すると予想されている（厚生統計協会，1999)。痴呆性高齢者は我々にとって、より身近な存在となることが予想されるが、痴呆性高齢者に対して人々はどのようなイメージを抱いているのだろうか。痴呆性高齢者に対する認識については、これまでに奥村ら(2003)による報告と松山ら(2004)による報告がみられる。奥村ら(2003)は痴呆介護に関わる専門職が抱く、高齢者および痴呆性高齢者のイメージについて調査し、イメージの違いに関与する要因について職種、同居経験の有無、祖父母とのかかわり度合などの点から検討している。松山ら（2004）は重度痴呆性高齢者に対する介護者の認識について検討し、介護者は脳血管性痴呆よりもアルツハイマー型痴呆のほうを多くの側面において否定的に感じているなどの知見を得ている。

老人観がその社会で老人がおかれている状況を反映するとの指摘（古谷野，1993）は痴呆性高齢者についても推測できることである。人々の痴呆性高齢者に対するイメージは痴呆性高齢者が社会の中で置かれている状況を反映していると思われる。しかし、前述したように、痴呆性高齢者のイメージについてはこれまであまり研究されていない。そこで痴呆性高齢者に対するイメージを測定することを本研究の目的とする。同時に高齢者に対するイメージも測定し、両者を比較し、それぞれのイメージの特徴について検討する。

また、高齢者イメージの研究はこれまで様々な側面から行なわれているが、高齢者イメージを高齢者に対する知識との関連から検討したものは少ない。そこで、本研究では高齢者に対する知識の観点から高齢者イメージについて検討する。さらに、痴呆性高齢者に対するイメージについても、痴呆性高齢者についての知識が痴呆性高齢者イメージに影響しているのではないかと考えられる。そこで、この両者の関連についても検討する。

方　法

1．対象者

短期大学学生84名のうち、有効回答であった76名（女性）を分析の対象とした。平均年齢は18.42歳であった。

2．調査票の内容

(1) 高齢者および痴呆性高齢者に対するイメージ

高齢者に対するイメージおよび痴呆性高齢者に対するイメージを捉えるためにSD法を用いた。SD法の形容詞には林（1978）による特性形容詞尺度を用いた（表1参照)。本研究の調査では、高齢者および痴呆性高齢者のそれぞれについて「あなたはどのような印象を持っていますか」という質問に対して5件法でそれぞれ回答を求めた。

表１　本研究で用いた形容詞対

心の狭い	心の広い
非社交的な	社交的な
責任感のない	責任感のある
軽率な	慎重な
恥知らずの	恥ずかしがりの
親しみにくい	親しみやすい
無気力な	意欲的な
自信のない	自信のある
短気な	気長な
不親切な	親切な
消極的な	積極的な
人のわるい	人の良い
生意気な	生意気でない
近づきがたい	人なつっこい
にくらしい	かわいらしい
軽薄な	重厚な
沈んだ	うきうきとした
卑屈な	堂々とした
感じの悪い	感じのよい
無分別な	分別のある

(2)　高齢者についての知識

高齢者についての一般的な知識を調べるために、詫摩（1991）の高齢者についての知識調査項目を用いた。○×形式の質問項目13問から成り、１問１点の13点満点とした。得点が高いほど、高齢者についての一般的知識を持っていると考えられる。

(3)　痴呆症についての知識

痴呆症についての一般的な知識（痴呆症の初期は物忘れを自覚しているか、など）を調べるためのテストを作成した（付表参照）。○×形式が11問、穴埋め形式が３問、２択問題が６問の合計20問からなり、１問１点の20点満点とした。得点が高いほど、痴呆症についての一般的知識を持っていると考えられる。

３．調査手続き

2003年10月、短期大学における授業開始前に１年次学生に調査の意図を説明し、調査票を配布し、記入してもらい、その場で回収した。

結　果

1．痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージとの比較

対象者のイメージ評定は、表1の左列の形容詞に「とてもあてはまる」を1、「ややあてはまる」を2、表1の右列の形容詞に「ややあてはまる」を4、「とてもあてはまる」を5とし、「どちらともいえない」を3として数値化した。

全対象者について、痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージを比較するため、それぞれの形容詞について、t検定を行った。その結果を表2にまとめた。高齢者イメージについてはほとんどの形容詞対において、肯定的な評定であった一方で、痴呆性高齢者に対するイメージではほとんどの形容詞対において否定的な評定であった。

表2　痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージ

形　容　詞　対	痴呆性高齢者イメージ		高齢者イメージ		t値	df
	平均値	SD	平均値	SD		
心の狭い－心の広い	2.99	0.84	3.41	0.80	3.46**	75
非社交的な－社交的な	2.80	0.95	3.42	0.84	4.87**	75
責任感のない－責任感のある	2.26	0.88	3.42	0.88	9.01**	75
軽率な－慎重な	2.45	0.86	3.43	0.82	7.65**	74
恥知らずの－恥ずかしがりの	2.52	0.92	2.75	0.97	1.57	74
親しみにくい－親しみやすい	2.54	0.94	3.54	0.96	7.33**	75
無気力な－意欲的な	2.69	0.88	3.19	0.73	4.09**	74
自信のない－自信のある	2.95	0.69	3.28	0.93	2.55*	75
短気な－気長な	2.67	0.84	3.22	0.96	3.77**	75
不親切な－親切な	2.93	0.68	3.61	0.90	5.44**	75
消極的な－積極的な	2.95	0.69	3.21	0.88	2.16*	75
人のわるい－人の良い	3.08	0.71	3.50	0.84	3.68**	75
生意気な－生意気でない	3.03	0.71	3.25	0.90	2.27*	75
近づきがたい－人なつっこい	2.51	0.89	3.13	1.01	4.45**	75
にくらしい－かわいらしい	2.97	0.64	3.36	0.80	3.40**	74
軽薄な－重厚な	2.72	0.76	3.41	0.87	5.37**	75
沈んだ－うきうきとした	3.03	0.78	3.13	0.75	0.88	75
卑屈な－堂々とした	3.00	0.71	3.30	0.86	2.38*	75
感じの悪い－感じの良い	3.01	0.58	3.41	0.84	3.46**	75
無分別な－分別のある	2.63	0.67	3.42	0.87	6.40**	75

* $p<.05$, ** $p<.01$

2．高齢者についての知識と高齢者イメージとの関連

高齢者についての知識テストを採点したところ、全対象者の平均値は6.26点（SD＝1.60）であった。この平均値（$\bar{x}$）と標準偏差（SD）をもとに、（$\bar{x}$＋SD/2）以上を高齢者知識高群、

（$\bar{x}$－SD/２）以下を高齢者知識低群とした。高齢者知識高群が15名、高齢者知識低群が24名となった。高齢者についての知識テストの平均値は高齢者知識高群が8.53点（SD＝0.74）、高齢者知識低群が4.54点（SD＝1.06）であった。両群のイメージを比較するため、t検定を行った。有意差のみられた形容詞対についての結果を表３に整理した。有意差が見られたのは「近づきがたい－人なつっこい」、「にくらしい－かわいらしい」、「卑屈な－堂々とした」、「感じの悪い－感じの良い」においてであった。

表３　高齢者についての知識による高齢者イメージの比較

形　容　詞　対	高齢者知識高群(n=15)		高齢者知識低群(n=24)		t値	df
	平均値	SD	平均値	SD		
近づきがたい－人なつっこい	3.73	0.70	2.92	0.93	−3.11**	35
にくらしい－かわいらしい	3.73	0.59	3.08	0.58	−3.36**	37
卑屈な－堂々とした	3.67	0.82	3.04	0.81	−2.34*	37
感じの悪い－感じのよい	3.73	0.59	3.17	0.96	−2.04*	37

* p<.05, ** p<.01

３．痴呆症についての知識と痴呆性高齢者に対するイメージとの関連

痴呆症についての知識テストを採点したところ、全対象者の平均値は11.30点（SD＝2.13）であった。この平均値（$\bar{x}$）と標準偏差（SD）をもとに、（$\bar{x}$＋SD/２）以上を痴呆知識高群、（$\bar{x}$－SD/２）以下を痴呆知識低群とした。痴呆知識高群が25名、痴呆知識低群が26名となった。痴呆症についての知識テストの平均値は、痴呆知識高群が13.60点（SD＝0.76）、痴呆知識低群が8.96点（SD＝1.40）であった。痴呆知識低群と痴呆知識高群の痴呆症イメージを比較するため、t検定を行い、その結果、有意差の認められた形容詞対について表４にまとめた。有意差が見られたのは「心の狭い－心の広い」、「非社交的な－社交的な」、「不親切な－親切な」、「人のわるい－人の良い」、「近づきがたい－人なつっこい」、「感じの悪い－感じの良い」においてであった。

表４　痴呆症についての知識による痴呆性高齢者イメージの比較

形　容　詞　対	痴呆知識高群(n=25)		痴呆知識低群(n=26)		t値	df
	平均値	SD	平均値	SD		
心の狭い－心の広い	3.38	0.92	2.77	0.82	−2.46*	48
非社交的な－社交的な	3.17	0.92	2.58	0.99	−2.18*	48
不親切な－親切な	3.21	0.83	2.62	0.64	−2.81**	43
人のわるい－人の良い	3.42	0.78	2.85	0.83	−2.50*	48
近づきがたい－人なつっこい	2.83	1.05	2.12	0.65	−2.93**	48
感じの悪い－感じの良い	3.29	0.62	2.81	0.63	−2.72**	48

* p<.05, **p<.01

考　察

1．痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージとの比較

対象者は高齢者に対して、「親切な」、「親しみやすい」、「人の良い」イメージを持っており、痴呆性高齢者に対しては、「責任感のない」、「軽率な」、「恥知らずの」、「近づきがたい」イメージを抱いていた。高齢者に対するイメージ評定の平均値は「恥知らずの―恥ずかしがりの」以外は、いずれも中立（どちらともいえない）の3より肯定的なものであった。一方、痴呆性高齢者に対するイメージ評定の値は「どちらともいえない」の3に近いものが多かった。このことは本研究の対象者の痴呆性高齢者に対するイメージはそれほど明確なものではないとも受け止められる。しかし、評定値は中立より否定的なものが多かった。痴呆性高齢者に対するイメージの評定値の低かった形容詞対を見ると、「責任感のない－責任感のある」、「軽率な－慎重な」、「親しみにくい－親しみやすい」、「近づきがたい－人なつっこい」、「恥知らずの－恥ずかしがりやの」であった。「責任感のない－責任感のある」、「軽率な－慎重な」で評定値が低かったのは、対象者が痴呆性高齢者に知的障害が見られるという認識を持っていたからかもしれない。また、「親しみにくい－親しみやすい」、「近づきがたい－人なつっこい」で評定値が低かったのは、対象者が痴呆性高齢者に対して、心理的な距離を感じているからではないかと考えられる。

2．高齢者についての知識と高齢者イメージとの関連

結果より、高齢者知識高群の方が、高齢者知識低群より、高齢者に対して、「人なつっこい」、「かわいらしい」、「堂々とした」、「感じの良い」イメージを持っていた。これらの形容詞対において、高齢者知識低群が高齢者を「どちらともいえない」と捉えているのに対して、高齢者知識高群はより肯定的に捉えていた。有意差の見られた形容詞対を見ると、“親近感”と関連があると思われるものが多かった。高齢者について正確な知識を持っている者の方が、持っていない者より、高齢者に対して親しみを感じているということが推察される。

保坂ら（1988）は老人や老人問題についての正しい知識が老人に対する関心を喚起し、老人と積極的に接しようとする態度や、老人の良い面を積極的に見出そうとする態度の形成に貢献するのではないかとの考えを示している。本研究の結果は保坂ら（1988）の考察を支持していると思われる。

3．痴呆症についての知識と痴呆性高齢者に対するイメージとの関連

結果より、痴呆知識高群の方が痴呆知識低群より、痴呆性高齢者に対して、「心の広い」、「社交的な」、「親切な」、「人の良い」、「感じのよい」イメージを持っていた。「近づきがたい－人なつっこい」でも有意差がみられたが、両群ともに評定値は3未満の否定的な方に偏っていた。結果から、痴呆症について正確な知識を持っている者の方が、痴呆性高齢者に対して肯定的なイメージを抱いていると言えよう。有意差の見られた形容詞対を見ると、高齢者についての知識と高齢者イメージとの関連の場合と同様に、“親近感”と関連があると思われるものが多かった。

対象者全員の痴呆性高齢者のイメージは中立よりやや否定的な方に偏っていたが、痴呆症に対する知識によって対象者を群分けし、比較すると、痴呆症についての知識を持っている者の

方が持っていない者より、痴呆性高齢者に対して、親しみを感じていることが示唆された。このことは痴呆症についての正しい知識を持つことの意義を指し示していると思われる。痴呆症についての正しい知識が、痴呆性高齢者のよい面を見出そうとする積極的態度につながるのかもしれない。また、一般的に我々は自分がよく知らない対象について、不安や恐れを感じたり、排除しようとする傾向があると思われるが、このことも本研究の結果に影響しているのかもしれない。

4．本研究の課題

本研究で用いた、痴呆症についての知識を測定するための質問紙は、痴呆症についての一般的な知識で構成した。痴呆症についての知識のどのような側面がイメージに影響を与えているかをより詳細に検討するためには、痴呆症についての疫学的知識や痴呆症者との接し方についての知識といったような複数の要素から成る質問紙を作成するべきであると考えられる。

また、本研究では、痴呆性高齢者のイメージについて「痴呆性高齢者について、あなたはどのような印象を持っていますか」と尋ねた。痴呆性高齢者といっても痴呆のタイプや重症度によって様々な臨床像を示すので、痴呆性高齢者について知っている者ほど評定が困難であったかもしれない。今後、同様の調査研究を行なう際には、痴呆症のタイプ別にイメージを尋ねた方がより正確に痴呆性高齢者に対するイメージを捉えることができると思われる。

引用文献

林　文俊　1978　対人認知構造の基本次元についての一考察　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），25，233-247

保坂久美子　袖井孝子　1988　大学生の老人イメージ—SD法による分析　社会老年学，27，22-33

厚生労働省大臣官房統計情報部　2004　平成16年　我が国の人口動態　平成14年までの動向，財団法人　厚生統計協会

厚生統計協会　1999　国民衛生の動向　厚生統計協会

古谷野亘　1993　老いに対する態度（柴田　博・芳賀　博・長田久雄ほか編）老年学入門：学際的アプローチ，pp.177-184　川島書店

古谷野亘・児玉好信・安東孝敏・浅川達人　1997　中高年の老人イメージ－SD法による測定－　老年社会科学，18（2），147-152

松山郁夫・小車淑子　2004　会話ができない重度痴呆性高齢者に対する介護者の認識　老年社会科学，26（1），78-84

中野いく子・冷水　豊・中谷陽明・馬場純子　1994　小学生と中学生の老人イメージ－SD法による測定と比較－　社会老年学，39，11-22

奥村由美子・谷向　知・久世淳子　2003　痴呆介護にかかわる専門職がいだくイメージの違いに関与する要因について－高齢者と痴呆性高齢者へのイメージの違いを中心に－　老年社会科学，25（2），233

滝川由美子　吉本知恵　横川絹恵　1999　看護学生の高齢者イメージの変化—老年看護学概論の授業前・後の比較　香川県立医療短期大学紀要，1，51-60

詫摩武俊　1991　これからの老い　老化の心理学，pp.14-15　講談社

矢島直子　2001　児童の老人イメージに関する研究－体験学習による老人イメージの変容について－　学校メンタルヘルス，4，87-93

付表　痴呆症についての知識調査で用いたテストと解答

1．以下の文章は痴呆症についてのものです。あなたの知っている範囲でお答えください。①～⑥では適切と思う方に○を、⑦～⑨は（　　）の中に適切な言葉を書き入れてください。

① 痴呆の初期は物忘れを自覚（ している ・ していない ）。
② 抗痴呆薬を投与すると痴呆は（ 治る ・ 治らない ）。
③ （ アルツハイマー病 ・ 脳血管性障害 ）の原因は脳梗塞である。
④ 痴呆はまず、（ 古い ・ 新しい ）出来事から忘れる。
⑤ 痴呆には物忘れなどの（ 中核症状 ・ 周辺症状 ）と、感情障害や問題行動などの（ 中核症状 ・ 周辺症状 ）がある。
⑥ アルツハイマー病の発症頻度は1：3で（ 女性 ・ 男性 ）に多い。
⑦ アルツハイマー病の死亡原因の第一位は（　　）である。
⑧ アルツハイマー型は、脳の全体にわたって（　　）が死んでいくものである。
⑨ 痴呆のケアには、身体面のケアと（　　）のケアがある。

2．以下の痴呆に関する文章について、正しいと思う場合には○を、誤っていると思う場合は×を（　）の中に書いてください。

① 痴呆症状がより強く現れるのは、より身近な者に対してである。（　）
② アルツハイマー病の発病から末期までは平均すると5年間である。（　）
③ うつ病でも、痴呆に似た症状を示す事がある。（　）
④ 計算が苦手になってくるので、訓練した方がよい。（　）
⑤ 現実にありえないようなことを話したら、訂正した方がよい。（　）
⑥ 新しい場所へ外出するなど毎日違う刺激を与えた方がよい。（　）
⑦ 自発的に覚えるように、カレンダーや時計は本人の目の届かない所に置く方が良い。（　）
⑧ 生活の中で大切なことは張り紙で表示するとよい。（　）
⑨ 慢性アルコール中毒も痴呆につながることがある。（　）
⑩ 知的障害や急性の意識の障害などで起きている認知障害も痴呆の一つである。（　）
⑪ アルツハイマー病といっても、人によって症状が違う。（　）

（解答）
1．①している　②治らない　③脳血管性障害　④新しい　⑤中核症状・周辺症状　⑥女性　⑦肺炎　⑧脳神経細胞　⑨精神面（心理面、心など）
2．①○　②×　③○　④×　⑤×　⑥×　⑦×　⑧○　⑨○　⑩×　⑪○